

■ 図書紹介 ■

谷川彰英編著『地名を生かす社会科の授業』
(黎明書房, 1986年)

溜 池 善 裕

本書は谷川氏の前著『地名に学ぶ — 身近な歴史をみつめる授業』の続編である。

前著は、著者が千葉大学教育学部の社会科教育演習で一貫して行なった授業づくりである地名を使った社会科授業（これは「地名教育」と名づけられている）を中心としたものであったが、本書は「まえがき」にもあるように、自己認識を育てるための素材としての地名を社会科の教材としてどのように取り上げたらよいのかを理解してもらうことを目的として、現場での地名教育実践を具体的に示すことをその中心に据えている。

本書の骨子は、なぜ地名がおもしろいか、地名は社会科の教材としてどんな価値を持っているか、地名を授業に取り入れていくにはどんなステップをふんでいったらよいか、授業に生かせる地名にはどんなものがあるか、であり、本書の構成も I 地名を生かす社会科授業とは、II 地名教育の実践、III 授業で使える地名 100 選、となって、具体的な現場教師の授業実践とその解説および地名教育の理論・方法論が組み合わされた形をとっている。

まず I は、地名自体のもつおもしろさの理由が「(1)私たちは地名を毎日日常的に使っていながら、その意味に気づいていない。(2)長い生活経験の中で、何度も地名の意味について考えたことがある。(3)地名はさまざまなことを語ってくれる。(4)一つの地名からさまざまな事象を関連して引き出すことができる。(5)自分たちの住んでいる地域を見直すことになる。(6)地名はクイズ的・パズル的な要素を持っている」ことにあると述べ、そういった地名の教材性の分析を行っている。それは、地名の属性という観的からは、①日常性・②具体性・③有意義性・④普遍性であり、子どもにとってという観点からは、①意外性・②親近性・③ゲーム性・④応用可能性である。

「地名とは何か」「地名の語るもの」に、柳田国男・吉田東悟・山口恵一郎の説が紹介されているが、それらの説に裏づけされながら子どもを視点に据えた著者なりの地名教育観が示されているのが意義深い。また、1947年の『学習指導要領社会編(II)』および1969年の『小学校指導書 社会編』で既に地名教育の有効性が述べられていることを著者が指摘しているのも興味をひかれる。この章の終わりには、どのようなステップをふめば地名を生かした授業をつくることができるかが図示されているが、数年にわたる著者の経験が生かされており、方法論的に有効

であると思われる。

Ⅱでは現場の教師による地名教育実践が示されている。それは以下の通りである。「成城プラン」（成城学園初等学校社会科研究部）、「地名から鎌倉時代を探る」（筑波大学附属小学校、有田和正），「地名探検 — 下名調査」（熊本県上益城郡益城町立飯野小学校、菊岡敏朗），「地名を生かした『身近な地域』の学習」（千葉県富津市立佐貫中学校、鈴木順一），「法隆寺地名改変と住民」（千葉県市原市立姉崎中学校、高石哲巳），「人権意識を高めるアイヌ語地名」（北海道教育大学釧路分校、松本成美、実践は山川功）。これらはいずれも地名の由来に着目するものであるが、法隆寺地名とアイヌ語地名を扱った二者は、それぞれ住民運動や差別といったこれまでにない地名の教材化を試みている。とりわけ、前者は、谷川氏がコメントしているように、地名をめぐる住民運動が教材化された初めてのケースという意味では公民分野で生かす地名教育としての価値が高い。

Ⅲは、授業で使える地名を選んで、その意味を解説している。掲げられている地名は、地形を表わす地名・歴史を語る地名（法制的・政治的な意味をもつもの、生産・流通に関連したもの、信仰に関連したもの、その他）に分類されており、地名の由来を比較的容易に知ることができる同時に、教師が地名を見る際の視点を提示してくれる。つまり、教材研究の際に地名の由来を調べる、地名を分類して授業構成に役立てる、日常において地名を見る目を養うといった点で有効であると考えられる。

著者の地名教育との取り組みは今年で8年になる。その実践・研究を通して、地名教育の効果として「①歴史が好きになる。②現在と過去がつながってくる。③地図が好きになる。④視野が広がる。⑤歩くことが好きになる」といった点をあげている。著者が、社会科教育の授業実践において地名に着目したのは「地名を取り上げることによって、間違いなく子どもたちは授業に眼を輝かせてくれる」という意識であり、「社会科という教科が前より好きになる」という確信であった。こういった意識や確信が8年という時間の経過の中で具体化されたといえる。学生とともに地名教育の実践を行なうことからはじめ、ここに来て地名教育は実際に現場の実践に受け入れられてきている。本書はその一端を示すものであり、現場の実践から伝わる熱意を通して地名教育に取り組む意欲をわかしてくれる。とくに、ⅠやⅢには、地名教育の方法やヒントが著者の研究・実践のまとめとしてはっきりと示され、その意味でも地名教育の恰好の入門書といえよう。

（筑波大学大学院）